
死んだ世界

Ciallis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだ世界

【Nコード】

N0024T

【作者名】

Ciallis

【あらすじ】

死んだ世界。

それは人々が楽になれる、自由になれるとされている世界。だが、そんなのは人々の望みでしかなかった。

戦うしか、

道は、ないのか？

記憶を失った少年は、死んだ世界で

何と出会い、そして、

何を失うのだろうか

プロローグ

「ちよつと、死んでんのに死んだふりってどういふこと!?!?」

その声を聞き、俺は目覚めた。

ハツと息をのむ。

目に映るのは、どこにでもありそうな夜の町並みが。

ここは、どこかの学校の校庭か？

いや、ちよつと待て。

俺はこんな所に来たことはない。

覚えもない、ここがどこだかも知らない。

俺はなぜここにいるんだ・・・

俺は今さっきまで何してた？

俺はどうやってここに来た？

わからない

いや、そんなこと以前に、

俺は・・・・・・・・・・

ぎゃき ん!

そんな音がふさわしいであろうげんこつ攻撃が、俺の頭へ降って来やがった。

「ちよつと! あんた、目の前にこっつこっつんな美少女がいるってのに、なんで私を差し置いて考え事しちゃってるわけ?」

なんだなんだ、こいつ。

自分の事、美少女っていうかよ、普通。

とかいろいろ心の中で突っ込みながらも視線を声の主へと向けた。

って………

視線を上げた先。

月明かりに照らされ、黒の長いつややかな髪が光っている。

そして、俺を見下す勝ち気そうな紅い瞳。

そして、えらく派手なシャツにネクタイ、超ミニスカ、ニーソ、ブ
ーツとモテ女を追求したような、そんな服を身にまとっていた。

とまあ色々思ったんだが、一言で端的に表すならばだな。

そこには俺が今までにあったことないであろうほどの
美少女が、いたのである。

しかも、うれしいかな、仰向けになってる俺に
覆いかぶさるかのようにしてその美少女はいた。

そして、あるうことが、俺の今のポジションからは、彼女の短いス
カートから太もも見えぎゃふああああああああああああああ
ああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「あ、あんた、ど、どこ見てんのよ!!!へ、変態、痴漢、鬼畜!」

「い、いや。お前、スカート短いだろ。だからお前の太もも見え
る俺の首からメリメリと音がするんだが何が起きてみぎゃああああ
あああああ!!!」

これぞ、元祖サソリ固めか!

って、そんな悠長に考えてる暇ないってまじで。

「いい痛い痛い！お願いだから俺を開放して！このままだと俺死んじゃうから！」

「はあ？」

「い、いや、はあじゃなくてさ。」

「死なないわよ。」

「いやいや、死ぬからこれ！」

「……………」

ん？何だこいつ。急におとなしくなりやがって。

「じゃあ……………試してみる？」

……………ふえ？

そんな素っ頓狂な声を発する暇もなく

静かな夜の校庭に響き渡る、一つの銃声。

ゆっくりと、流れるように、倒れてゆく影。

そして一度、俺はこの狂った世界で

終わったのだった。

プロローグ（後書き）

初めての小説投稿です！

この物語は、雨舞と緋奈世

二人で作っていかうと考えている物語です。

文章、物語の構成など、至らぬ点多いかと思いますが、
どうぞ宜しく願います。

アドバイス、ご指摘のほど宜しく願います。

前言撤回！

「ちょっと、また死んだふりする気なの？」

むにっという音とともに降ってきた声と頬の痛みで俺は目覚めた。

俺の目に映ったのは、学校の保健室のような殺風景な天井と、あの夜俺を撃った美少女だった。

とっさに体中を探ってみた。ない。銃弾が、ない。銃痕が、ない。いや、それどころか

傷さえないのである。

「ちよっ、あんた自分の体触りまくって何よ。そういう趣味なわけ？きもっ。」

俺にそんな気持ち悪い趣味はあいにくない、じゃなくて

「いや、傷がないんだよ！」

「何の？まさか、あんた俺には勇者の印があるんだ、とかそんな痛いこと言い始めるつもりなの？」

「違っつて！俺、お前に撃たれたんだよ！おまえにサソリ固めされて死にそうになって、死ぬって言ったらお前が急に、こっ、バキユーンとだな」

「それで？」

それでっつて、何なんだよ

「あんたは死んだの？」

死ぬぐらいいたかったっつーの、って・・・

「俺、死んで、ない？」

「気づくのおっそ！あんたの頭にはちゃんと脳入ってんの？」

「な、なんで死んでないんだよ！お前は俺に何をした！いや、それ以前にここはどこなんだ！なぜ俺はここにいる！」

一気にまくし立てる俺に、その少女は俺のたった一つの質問だけにたった一言だけ答えた。

「ここは、死んだ後の世界よ。」
言葉を失うしか、なかった。死んだ後の、世界？

俺は、死んだのか？

「う、嘘は寝て言うもんだぜ畜生！俺には死んだ記憶なんてないぞ！」

って、まてよ。俺、死んだ記憶の前にだ。

「俺、誰だ？」

「冗談は寝て言いなさい。あんたが言ったんでしようが。」

「違う。俺は自分が誰なのか、わからない。わからないんだ！」
俺はほとんど錯乱状態の中、必死に思考をめぐらす。

目を相当眉間にしわが寄るくらいきつく閉じた。
しかし、見えてくるのは真っ黒な世界だけだ。

だめだ、何も思い出せない。

「ああ、あんたは記憶がないパターンの人間なのかあ。大丈夫よ。
何かきつかけがあればすぐに思い出せるようになるわ。今は死んだシヨックで記憶が飛んでるんでしょ。」

あの少女が何か言っているが、俺の耳を素通りしてゆく。そんな俺の姿を見て、少女は俺の顔を優しくデコピンした。

「こら、あたしの話を聞きなさい。今は記憶がなくなつて不安だろうけど、あたしがちゃんと付いてるから。安心しなさい。」

安心できるもんか、と言いたくなつたが、その言葉は俺の口から出ることはなかった。不覚にも彼女の言葉に安心してしまふ。荒かつた息も落ち着いてきた。

「ん、どうやら落ち着いたみたいね。んで、私の言葉を信じる気になつた？」

落ち着いたのとお前の言葉を信じるのとは別物だ。俺にはまだ死ん

だなんて自覚は一切ないぞ。

「別にいいわ。」

いいんだ。

「あんたが信じようが信じまいが、あんたが死んだことに変わりないんだし。」

「どうやらこの少女は人の話を聞く、ということとはしないらしいな。」

「あんたが死んだことを自覚できるようになるには、記憶が戻らないと無理っぽいし。あんたが……って」

その少女は俺のほうをじっとみて、考えるようなしぐさをしながら、

「あんたを呼ぶときに『あんた』って連呼するのはカッコ悪いわよねえ。」

たしかに俺も自分を撃つてきた相手にあんた呼ばわりされるのは気に食わんな。

「それにあんたに呼ばれるときに『お前』だなんて呼ばれるのも腹が立つわ。」

そんなこと知るか、と言いたくなった。なんせ俺はお前の名前を知らんからな。

「ねえ、なんか名前とか思い出せないの？名字でも、下の名前でもいいわ。」

「そう言われてもなあ……って」

なぜか俺の脳裏にこびりついて離れないひとつの名前が浮かんできた。そして、口から自然にその言葉は出てきた。

「日向ひなた」

「名前なの、名字なの？」

「いや、そこまではわからんが、名前って聞いた時にこの名前が浮かんできたんだよ。」

「それは本当にあんたの名前なのかしら。」

反論できねええええええ、というか、記憶喪失に記憶の確実性を求

めること自体、間違ってるだろ、おい！

「唯一覚えていたことですら確実じゃないってのね。まあいいわ、私は椎名あかね。これからよろしくね、日向。」

そう言つて、彼女は細く白い手を俺に差し伸べてきた。正直言つて、俺は死んだことも認めてないし、ここがどんなところなのか、何がよろしくなのかもわからないのだが。

でも、それでも俺は、彼女の手を取っていた。そして、俺からも彼女にむかつて言葉を発した。

「ああ、これからよろしくな、あかね。」

ぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ

ん、なんだ？急に握る力が強くなってきたし爪が食い込み始めたしなんか痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

！！！！！！

「な、名前を教えた瞬間に、ファーストネームを、呼びきり、ですつて？」

なに？なんか俺、やばいの？そうなの！？

「日向、あんたどうやらレディに対する態度が身についてないらしいわね？これから私がみつっつちり教育してあげるわあ。そこに直りなさい、日向」

「ぎゃあああああああ！ご、ごめんなさい、椎名さま！謝るから、謝るからどうか、そのどこからか出てきたスタンガンを片づけてみぎゃあああああああ！！！！」

前言撤回だ。俺はあの夜、椎名に撃たれた夜、こいつのことを美少女だと思った。しかし、こいつは美少女なんかじゃない。こいつは

・

「こら待て日向

！まだ話は終わってないのよ

！！

！

美少女の皮をかぶった、トンデモ暴力少女だ。

ラインく境界線く

神秘的なものは、どこか人を引き付ける魔性の力があると思う。

神秘的な風景、神秘的な人物、神秘的な出逢い……。それらの全てに共通する事は、神秘的と感じた時にある一種の恐怖の様な感情を抱くことだ。神秘的な風景、例えば宇宙の姿を目の当たりにした時綺麗な風景だ、と思いながらも自分がいかにちっぽけな存在であるかを思い知らされるような恐怖に陥ってしまう。だけど、そんな感情を持つからこそ、人は神秘的なものにとらわれてしまっんじゃないか。

そう、俺もそうだったんだ。俺はあの少女、椎名あかねに神秘的な「何か」を感じたんだと思う。あの日、俺が椎名の手を取った時俺は椎名に自分にはない、どこか神々しいモノを確かに感じた。あの時の椎名は俺を圧倒していて。俺はそんなあいつに圧倒されて。神秘的な何かを感じて。だからあの時俺はあいつの手を取ったんだ。だから手を取ったのに……

さて、どうしてこんなことになっているんだろう。

今、俺は椎名こと、トンデモ暴力少女に引きずられてる。まずなんでこんなことになってるか説明しろと言われても、無理な頼みだ。なんせ、当事者である俺がどういう状況がよく分からないんだからな。

まず俺が分かる範囲で状況を整理してみよう。

とりあえず昨日、俺が椎名の手を取った後は、保健室のようなところでごろごろしたり、どこからどう見ても学校にしか見えない校舎をブラブラしたりしていた。うん、昨日は実に有意義な時間を過ごせた。

今日も俺は朝から校舎をブラブラしていた。まだこの「死んだ後の世界」に来てから、俺的には3日しかたっていない。ましてや記

憶なんぞ戻る気配もさらさらない。なんとなく長い付き合いになり
そうなの「世界」を見てみたいと思つて探検していたのだ。

どうやらあまり生きていたころの世界とはあまり変わらないらしい。
自分自身の生きていた時の記憶はないのに、こういうことは覚えて
いる。実に変というか便利な記憶喪失だな。

そんな平和なことを考えながら保健室から出て運動場に向かった
俺にあいつ、椎名が現れたのだった。

「痛い、痛いから。あかね、許して・・・」

こいつほんとに女か？物凄い腕力で俺の腕を引つ張っている。

「すみませんでした。椎名様許してください。お願いします！！」

「フンツ。まあ許してやつてもいいわ」

今ものすごく死の危険を感じたが、回避できたようだ。まあ、な
にが許されたのかよくわからないんだが。俺、なんかしましたか？

死といえば、俺の記憶は戻るのだろうか、なんて急に考えてしま
う。日向ひなたという、名前さえ本当の名かも分からないのに。そして、
色々な意味でどこに向かつてるのか良く分からない、俺を引っぱっ
ている彼女には、死んだ時の記憶があるのだろうか。

「そつといえはあんた。あれよあれ！！あれ！！」

そんな椎名の声で、俺は思考から現実へと意識を戻した。しかし、
あれ、つて言われても俺にはさっぱりなのだが。

「あれよ！！分からないの？」

いや、分かるわけがないじゃないか。国語の問題でよく指示語の指
している文はどれですか、何ていう問題がよくあるが、この問題は
絶対に誰にも解けないぞ。もちろん俺も分からんが。

「チツ。本当にクズね。アンタのせいで何言おうとしたのか分かん
なくなつたじゃないの！」

いやいや、そんなことを言われても困るんだが。世の中、本当に理
不尽だな。美少女だからつて許されることと許されることがある
んだが。ちなみに今のは俺の中では許されない側にはいるな。

色々ぐだぐだ考えている間にも結構な距離を歩いたようだ。あの、俺が目覚めた学校のようなところは、住宅が並ぶどこにでもありそうなの町並みが延々と広がっていた。しかし、今、俺の目に映るのは古い木造住宅、それも人の住む気配などが一切しない、廃墟が並んだ風景だった。

「なんだよ、ここは。嫌な空気がするんだが。」

「そうよねえ、お化け屋敷にしては出来そこないのような感じはするわね。」

ダメだこいつ、人の話を聞くことを知らないらしい。

それから10分ぐらい歩いたところで前方に白い大きな廃墟のようなものが見えてきた。一見、学校にも見える建物だが。

「着いたわよ。ここは旧病院ね。」

で、なんでこんな処に俺を連れてきたんだ？こいつは・・・

「何で、って顔してるわね。そんな事も分からないの？」

残念ながら、ちっとも分からない・・・。

「それは、そのあれよ!!！」

だから、あれじゃ分からないって。残念ながら俺にテレパシー能力はない。本当に残念だ。

「日向の為じゃないの!!記憶、取り戻したくないの？もう、分かりなさいよね、このぐらい」

心なしか、頬が赤らんでくる気がする。そう、だったのか…俺の為…。

記憶はもちろん取り戻したい。しかし、もう一人の俺が警告してくる。

記憶なんて本当に取り戻したいのか？

思い出したくない忘れたい記憶だから、お前が勝手に忘れてるだけじゃないか？と。

そうかもしれないと、少し思う。思い出す恐怖と自分のことを知

りたい欲求が、俺の心には確かに雑居していた。

俺の無言をどうとらえたかは分からないが、椎名はまるで俺の無言をあいっなりに理解したかのようなそぶりを見せてから、再び喋りだした。

「この廃墟はね。ラインなのよ。意味、分かる？」

「どういう意味なんだ？」お願いだから、日本語でしゃべってくれ。「つまり、私たちがここまで来るのに見てきた世界とは全く別物なの。私、ここにはきつとこの世界の奥深い部分が隠されていると思うのよ。例えば、そうね、化け物がいるとか……」

「は！！？？ば、化け物？そんなものいるのか！？危ないだろ！！」「あくまで仮定の話よ。私はこの世界に来てから結構色々な場所を見てきたわ。でも、ここから先は私も行った事がない。」

その気持ちは、分かる。俺にもこの場所は明らかに異質だって事が容易に想像できた。

「だけど、日向の記憶はここから先に、というか化け物を見てたら思い出すんじゃないかと思って。」

いや、、そんなにシリアスに言われても……。というか、椎名さん。あなたの中ではここに化け物が要ることは大前提の事なのでしょうか。

「ここにくるなんて、異例なのよ。絶対に来たくないと思ってた。でも、人に会うことはほとんどないの。だから、せつかく出会えたあなたの記憶を取り戻してあげたいの」

椎名のその言葉に、不覚にも俺はゾーンと来てしまった。そうか、椎名。お前、まだあって間もない俺の事を、そんなに大切に思ってくれている……

「だから、日向は私とこのライン、つまりは過去と未来の境界線を超えるべきなのよ！……」

いや、もしかして、椎名。お前……行きたいだけなのか？

なんなんだ、この青年は。なぜ剣を振りかざしてくるんだ。に、逃げなければ。殺される。殺される！椎名は茫然とその場に立ちつくんでいた。

そして、振り下ろされる。まっすぐに、振り下ろされていく、剣筋が、俺の目に映った。

よろしく、してください

「はあ、重たかった。もう少し軽い剣にならないもんかな」

俺の耳に届いたのは、そんな言葉と、金属がどこかに突き刺さるような音だった。そんな音にビックリした俺は、思わず固く閉じてしまっていた目をうつすらと開けた。

こげ茶色の癖っ毛頭。顔は明らかに「かつこいい」ではなく「かわいい」部類に入る整った顔。彼の髪の色と同じセーター、ズボンというとうな、どこかの学校の制服のようなものを身に着けていた。そんな青年が尻もちをついた俺を見下ろすような少し離れたところに立っていた。

「ん？何？僕の顔、そんなに变かな」

俺はしばらく言葉を発する事が出来なかった。ついさっきまで、あの巨大な「怪物」をたった一人で蹴散らしていた「化け物」がこんなに近くににいるのだ。だれでも黙りこむと思うぜ、この状況に実際に立ったとならな。

「……お前は、何者だ」

ようやく腹の奥から絞り出した言葉を、俺はその青年に向かって言った。

「僕からすれば、君に何者だって聞きたいんだけどな」

質問に質問で答えやがった。ならこう聞けばいいのか。お前の正体はなんだ、とな。

「ううん、正体、と聞かれても困るなあ。抽象的すぎないかい？」
人の質問に答える気がないらしい。ならさらに具体的に聞こう。お前はここで何をしていた。

「質問者が分かっている問いに答える義務はないよ」
いちいち理屈で返してきやがるな、こいつ。なら、何のためにこんなことした。

「証人喚問とかじゃないんだから、絶対に答えなければならぬわ

「けじゃないよね？」

「うわああああ！いかん、いらいらする！俺が質問してるってのに、なんなんだよお前は！」

もう限界だった。自分が質問してるのか、なんなのかすら分からなくなってきた。俺はイライラした気持ちを抑えるべく、自分の頭をわしゃわしゃした。

「あっははは！これぐらいでへばっちゃうかあ。まあ僕の予想通りかな」

どうやら俺はこのエセ教授のような喋り方をする青年に試されていたようだった。むかつくな、こいつ。

「まあ、これ以上いじめるのはやめようかな。で、僕の正体を聞いてたっけ。」

ああ、そうだ。最初っからそう素直に答えときゃいいんだよ。

「榊原一誠だよ」

「いや、俺はお前の名前を聞いてるんじゃないよ……」

「同じことだよ。名前っていうのはその人を表すためのものだろう？だから、正体、と聞かれたから名前を答えたんだ。違うかい？」

言いたい事は良く分からなかったが、それらしいことを言ってるような気がしたので黙っておくことにした。

「それで、君たちは何者なんだい？こんなところに来るなんて」

「あ、ああ。俺は日向。んであっちにいるのが……おい、椎名！」

あの超トンデモ暴力少女は、未だに茫然としている様子だった。

「……え、ああ、何、日向」

「何、じゃねえよ。今、こいつと自己紹介してるところだろ。何いっつまでポーっとしてんだよ」

「あ……そうだったの」

何だ、こいつは。いつもに比べて明らかにおかしい。あの「怪物」を見てからだろうか。とりあえずそんなことは放っておいて、俺は椎名に榊原を紹介した。とはいってもあいつの名前だけしか知らないんだがな。

「榊原君ね。よろしく。私は椎名あかね」

あいつは自分の名前を言う頃にはすでに自分を取り戻しているようだった。

「椎名さんに日向君か。どちらもいい名前だね。これからよろしくね」

「ああ、よろしく……つてまで。俺はよろしくするとは言っていないぞ」

「いや、でも椎名さんはよろしくつて」

「くそつ。俺はあんな「怪物」を呻かせるような「化け物」のお前と仲良くする気はないぞ！」

そうだ、こんなファンタジックなことをするためにここに来たわけじゃない。俺は「俺」を取り戻すためにここに来たんだ。

「そうか、残念だな。もしかしたら、「君」を取り戻させてあげられたかもしれないのに」

「ああ、分かってくれて何よりだぜ……え？」

「もしかしたら、この世界から出て、新しい人生を歩むことだってできたかもしれないのにね」

「ちよつとまで、それはどういう意味……」

謎の、いや、もしかすればこの「世界」の本質にかかわるようなことを喋っていたんじゃないか。

「のつつつつたあああ！」

急に椎名が大声を張り上げた。椎名、叫び声は俺の専売特許だぞ。

「本当に、本当にこの世界から抜け出すことができるのよね！？そうなんでしょ！？」

「うん、僕とよろしく、してくれるなら、ね」

「よろしく、榊原君！全力で歓迎するわ！」

え、何？なんか話が進んじやった感じなの？ねえ。そんな俺の声はどうやら椎名には届いてないようだった。そんな浮かれる椎名の横から、榊原が近づいてきて、俺の前で静かに腰を下ろした。

「君は、自分を取り戻したくは、ないのかい？」

その声はまるで椎名が俺によるしく、と言って手を差し伸べてきた風だった。だから俺はあいつの手を取ろうと左手を伸ばそうと…さくっ

そんな軽快な音が廃病院に響き渡った。そして、俺の左手を赤い液体がつつたう。あれ、なんかずきっずきしてきたぞ。なんでだろうなあ。

「あはははははは！ま、まさか本当にやるとは思ってたよ！あははっ！」

そんな榊原の笑い声が反響した。何なんだ。

「左、見てごらんよ」

見た。物凄い大きさの剣が床に刺さっていた。そして、俺の手がその剣に当たっていた。

「まさか、床に挿しておいた剣に腕が当たって切れる、なんてことになるなんてねえ。これは予想外だなあ、あっははははは！」

またまた、前言撤回だ。こんな奴と、よろしくしてたまるかあ！

そんな俺の心からの叫びは、椎名の浮かれた感じの軽快な歌と、榊原の高らかな笑い声にかき消されて、廃病院にこだますることはなかった。

よろしく、してください（後書き）

高速更新なので内容も薄っぺらで段落も付けれてません。ごめんなさい。また付けておきます。by 緋奈世

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0024t/>

死んだ世界

2011年6月24日14時28分発行